▲3年生の選手たち

▲1、2年生の選手たち

クラブチーム練習訪問❷

埼北ポニーウィンズクラブ

[ポニーリーグ]

加盟するポニーリーグ独自のルールを生かし、好成績をあげる埼北ポニーウィンズクラブの活動は、土・日曜、祝日のみ。平日は学校生活のほうを重視しながら、選手個々でできるメニューを取り入れるなど、細かな指導が実践されている。

文・写真（日米親善分除く）／松井裕一、日米親善分写真：埼北ポニーウィンズクラブ提供

TEAM DATA

代　　表：金田康嗣
副 代 表：服部正臣
事務局長：富澤凌輔
監　　督：三浦文雄
コ ー チ：神田義弘、内原　工、村上幸夫、宮本義治、橋本凌也、幸田康彦
活動場所：富士電機機器制御（株）吹上工場グラウンド
設　　立：1998年
部 員 数：71人（3年生22人、2年生23人、1年生26人）
活 動 日：土、日、祝
HP：http://saihokupony.sakura.ne.jp

一中学生として学校生活を重視 週末に大好きな野球を存分に励む

各全国大会で1年生チームが準V 3年生チームも8強に進出

「僕は試合に出られないのですか？」。スタメンを外れ、イニングが進む。「僕は何回から出られるのですか？」。

積極的で、味のある選手が少なくない1年生13人のチームが、今年の全日本選手権ブロンコ大会で準優勝を成し遂げた。試合をつくることのできる先発2投手の安定した投球をバックがもり立て、粘り強い戦いを繰り広げての快進撃。過去に準優勝の実績がある全日本選手権大会では、3年生チームが8強に進出した。ポニー選抜チームを世界大会準優勝に導いた経験を持つ、三浦文雄監督は躍進を振り返る。

「（どちらのチームも）勝ち上がっていくにつれて、ご父兄も含め、チームがまとまってきました。勝負にこだわってはいけないのかもしれませんが、やはり勝負事なので勝つことでの一戦ごとの成長には、目を見張るものがありました」

ポニーリーグには、スタメンの9選手に限り一度ベンチに退いても再び出場できる「リエントリー制」や、1大会に同一チームから最大4チームが出場可能となっているなど、公式戦で独自のルールがある。先の両大会で、埼北ポニーウィンズクラブはそれぞれ2チームずつエントリーした。

他の硬式リーグと比べると、試合数が多いことも特徴の一つ。「試合を通じて覚えることがあり、経験は絶対に大きい。みんなを試合に出してあげたい」と三浦監督。その言葉通り、3年生チームが出場した8月末から開催された大会の初戦では、20人を超える ベンチ入り全選手が出場。選手間で「次はおまえの出番だぞ！　準備しろー！」といった活気のある檄が何度も聞こえてきた。一方で、出場機会が多いことで、選手間同士の競争意識が薄れてしまったり、一発勝負のトーナメントで強さを発揮しにくいなどといった課題もあるという。

熱中症対策をはじめ健康管理と個々で向上できるアプリを利用

埼北ポニーウィンズクラブの練習拠点は、埼玉県内では運転免許試験場が所在することで知られている鴻巣市。富士電機機器制御工場のグラウンドを借用している。今夏はそのグラウンドで国際交流が行われた。日本ポニーベースボール協会が主催する日米親善大会は、コロナ禍の影響で中止を余儀なくされてきたが、今年、3年ぶりに開催に。ホスト国のホームスティ先として、選手たちの自宅に米国の選手たちを受け入れ、合同練習を実施した。

取材日は、その直後の8月下旬の午後。熱中症対策をとったなかで練習がスタート。Tシャツとハーフパンツ姿でウォーミングアップ、キャッチボール、トス打撃。その後、ユニフォームに着替えてフリー打撃とノックが行われた。また、熱中症指数計を使用し、気温が上昇して一定の数値に達し

日米親善の様子。子どもたちは言葉が通じなくても、「ボディーランゲージなどですぐに意気投合していました」（内原エコーチ）。レクリエーションで米国の選手たちが最も喜んだのは「スイカ割り」だった

夏場の練習の熱中症対策として、開始時のメニューではユニフォームを着用しない

た場合は、練習の最中でも切り上げている。

練習の合間にスタッフが選手たちに「体調は大丈夫か？」と常に確認し、15時には通称“おにぎりタイム”が設けられている。「体づくりのために少しでも量を食べようと、昼食にプラスアルファという意識づけです。中学生は個々で食べる量の差があるので、特に量は決めていません」（金田康嗣代表）。

このような取り組みにより、練習中に体調不良となる選手が少なくなったという。また、中学生は第二成長の時期。“おにぎりタイム”のほか、無料通信アプリLINEを利用した「食育」を行っている。チーム専属の栄養士が、選手に必要な栄養管理をサポートする。例えば、苦手で食べられない食べ物があった場合、同じ栄養素のある他の食べ物の紹介や、ケガをしてしまったときのメニューのアドバイス、さらにレシピの動画も公開している。

「まだ体の大きくない選手は食べる量も少なく、時間もかかる。そのような選手の親御さんが悩んでいることを知りました。それならば、食べられないなりにどう栄養補給をすればいいのか。『食べることは大事』ということを、親子でコミュニケーションを取りながら考えていただきたいと思っています」と、金田代表はねらいを説明する。

さらに、チームで契約し、アプリを使用した育成トレーニング診断も取り入れている。選手たちは3カ月に一度、反復横跳びや立ち幅跳び、立位体前屈など、時間にして約1時間の体力測定を行う。測定結果を基に、アプリから自宅でできる選手個々のトレーニングメニューを提案してくれる。また、過去の数値のデータを一覧表にもしているため、選手たちは自分の現在地を知ることで、改善しなければいけないと思えば、おのずとメニューに取り組む。

平日練習は行わないことで自ら取り組むきっかけをつくる

チームとして活動するのは、基本的には週末の土曜・日曜と祝日。平日練習は行わない。「選手は、ご家庭、地域、各中学校から預かっている大切な宝物です。○○中学校の生徒として、学校生活が一番大事なのです」（金田代表）。

選手たちは必ず、学校の部活動にも所属する。歴代では、陸上競技などで県大会の表彰台に上がった卒団生が複数入いるという。平日は学業面をはじめ、充実した学校生活を送る。そのなかで、食事・体力面、素振りなどで技術面を、個々で強化すべき野球の部分と向き合う。その成果を、週末のチームでの練習や試合で披露していく。

「野球に取り組む意識や姿勢は、入団時から各々違います。“自分でやらなければいけない”という主体的意識のスイッチを少しでも早く入れてあげたい。それが高校へ進学して野球を続ける上でも優位につながると考えます。そのきっかけづくりをしています」（金田代表）。

チームの取り組みとして、2008年から年2～3回、オリジナルで作成した「学校生活自己申告表」を各選手に配布している。主な記入項目は、学業の成績をはじめ、所属部活動の成果、担任の先生からの指摘事項、学校生活の課題や目標などがあり、提出には保護者確認欄へのサインが必要となっている。

目的は、学校生活をしっかり送るという自覚を持たせること。その上で、週末の野球に取り組む。また、こちらも親子のコミュニケーションで、一緒に学校生活を振り返る。

「最終的には高校でも3年間、野球を続けてほしい。私たちは（選手の）1年生のときから学校生活を把握し、3年間の成長を確認することで、選手個々の適切な高校進路選択の材料としています。これまでの経験上、希望する高校ができたことにより目標設定ができ、学校の成績が伸びて、野球も向上しています」（金田代表）

また、学校生活での課題があった場合には、選手たちは担任の先生などに確認をして改善に努めている。そういった取り組みの成果の一つとして、“本当のやんちゃ坊主”がいなくなった（にならなくなった）という面もあるそうだ。

学校生活自己申告表（3年生用）

氏名
生年月日　年　月　日
本籍地
現住所地

年間	教科	教室	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健・家庭	英語(英会話)
2年時前半										
2年時後半	評定									

年間	教科	教室	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健・家庭	英語(英会話)
3年時前半										
3年時後半	評定									

現在の生活ぶりの簡潔要項（家から出たか、就職先）

学校生活の様子と課題

家庭環境の変更（連絡のとれた連絡先）

将来の進路希望
第1希望高校：　　第2希望高校：　　第3希望高校：
第4希望高校：　　第5希望高校：　　第6希望高校：
専門学校・大学・職業系（下線引）　　上級学校：　　就職先確認（サインmm/dd）

「学校生活自己申告表」。3年生用のシート（画像）には希望する高校を第3希望まで記入する項目があり、春休み期間中に一度、野球部の練習見学に行くことをすすめている

「技術は未熟でも人として一流であれ」

卒団生たちが築いてきたチームの良き伝統がある。高校3年最後の夏の大会を終えた多くの卒団生たちが、グラウンドにあいさつに訪れる。そして例年、夏休み期間中の最終日曜日には、卒団した高校3年生が母校のユニフォームを着用し、中学3年生の選手たちと試合を行う。決して強制での参加ではないなかで、この夏は3年前に卒団した12人全員、さらに、その卒団生全員の父兄も参加したという。「みんな楽しみにしてくれていて、当日は同窓会のようでした。長く続けていくことが大事ですね」と、金田代表はしみじみ語る。

取材日に練習に参加していた小島大輝さん（春日部共栄高3年）と佐藤恵さん（本庄東高3年）に、中学3年当時のこの試合の印象を聞いてみた。「中学レベルではいない投手の球速や打者の飛距離、体格を見て、高校では自分たちもそうなりたいというモチベーションになりました」。3年間チームで学んだことも話してくれた。「野球だけでなく、私生活や勉強のことも指導いただき、高校でも文武両道を目指しました」。

高校進学に関しては、野球（スポーツ）の特待生だけではなく、学業の特待生として入学する選手も少なくない。過去には、県内屈指の公立校に進学して投手として活躍し、東京大学に合格した卒団生もいるという。

「技術は未熟でも人として一流であれ」

埼北ポニーウィンズクラブのホームページのトップを開くと、目立つ文字で書かれている。この言葉を普段の練習の最後に、選手たちは唱和しているという。「選手たちだけでなく、私自身の戒めでもありますし、大人たちスタッフも“一流”を目指す意識が大事だと思っています」と、金田代表は語る。

「超一流の大谷翔平選手（エンゼルス）が、ゴミを拾ってポケットに入れている。私たちは富士電機さんのグラウンドをお借りしていますし、このような当たり前のことを当たり前にできるようになることが大切です。選手たちにはわかるようになるまで、粘り強く指導しています」と三浦監督は話し、「選手たちには、もっと野球を好きになってもらいたい。チームで活動する週末が来るのをワクワクするようになってもらいたい」と続けた。

「卒団後も高校3年間、野球、スポーツを続けてほしい。それが人生の礎になると思っています」（金田代表）

きっと選手たちは、週末を心待ちにしている。そして卒団後、一人の人間として、学んだことが生かされる――。

“おにぎりタイム”中の1、2年生選手たち

「野球を好きになって、チームで活動する週末が来るのをワクワクするようになってもらいたい」
（三浦監督）

各学年・チームに監督を置き、その代が進級しても、指導する担当の学年を変更しない。理由は「例えば、上級生から下級生を担当すると、レベルが下がっていると感じてしまう場合などがあるからです」と三浦監督